

令和4年度 研究概要

<p>所属名</p> <p>カリキュラムセンター</p>	<p>研究会議名</p> <p>学力分析研究会議</p>
<p>研究主題</p>	<p>新川崎市学習状況調査の分析と活用に関する研究 — R-PDCA サイクルを意識した授業改善を通して —</p>
<p>育成を目指す 資質・能力</p>	<p>学校教育目標等で示す資質・能力</p>
<p>研究内容</p>	<p>本市で実施している現行の川崎市学習状況調査（以下、現調査）では、各学校における教育課程の編成や指導の改善において一定の成果をあげている。しかし、川口（2014）が指摘した全国学力・学習状況調査の課題にもあるように、現調査の問題設計では、年度ごとの成績の変化を捉えることはできない。</p> <p>近年のコロナ渦においては全国的に ICT 環境の整備が進み、本市でも「かわさき GIGA スクール構想」のもと、1 人 1 台端末が配備され、スタディ・ログなどの教育データの蓄積がなされている。こうした社会環境の変化及びこれまでの取組を踏まえ、本市では、各学校が児童生徒の学習状況等を的確に把握し、その実態に応じた教育活動が行えるよう、継続的に経年比較しながら調査を実施することが必要であるとの認識を示した。</p> <p>本市では「第2次かわさき教育プラン第3期実施計画」における新たな事業として「市学習状況調査の結果活用」を位置づけ、令和5年度より、新川崎市学習状況調査（以下、新調査）を実施することとした。新調査では、調査対象学年を小学校4年生から中学校3年生までの6学年に拡充し、IRT（項目反応理論）を用いた問題設計を行うことで、同一学年間での比較や同一母集団の経年変化を見ることを可能とした。また、各学校が分析システムを使えるようにすることで、より自校の実態に即した分析を行えるようになった。今後は、各学校において継続的に経年比較しながら調査を実施し、児童生徒の学習状況を的確に把握することで、より根拠に基づいた指導を行うことが期待されている。</p> <p>そこで本研究では、新調査の結果を分析・活用し、効果的に授業改善を行えるための手立てについて研究する。その際、調査結果の分析で終わることなく、確実に授業改善につなげていくために、R-PDCA サイクルに着目した。この授業改善に向けたサイクルでは、調査結果から実態を把握するための調査（Research）を行い、授業の計画を立て（Plan）、授業実践を行い（Do）、実施状況を評価（Check）し、改善（Action）を図っていく。また、学校全体で結果活用に取り組むために、サイクルの起点となる調査（Research）として、学校教育目標等で示す資質・能力を意識した分析を行う校内研修会を企画・実施し、授業改善の手立てについて検討し、その後の授業実践につなげていく。こうした一連のサイクルによる授業改善をモデル校にて実施し、その効果については、児童・生徒の学習における行動や発言、他者との関わり、記述内容等をもとに検証する。</p> <p>令和5年度からの本実施へ向け、市内各学校が円滑に取り組めるよう、調査モデル校と協力して、新調査の実施から結果の分析・活用といった一連のサイクルにおける成果と課題をまとめていく。</p>